英米文化の背景
「英米人の迷信・俗信」考 (7) Ⅲ 恋と結婚
―その2 婚約・結婚予告・結婚と結婚式

藤高 邦宏
倉敷芸術科学大学教養学部

(1998年9月30日 受理)

はじめに

いずれの文化の人々の間でも，一つの物事についての表と裏の両面的解釈がなされることがある。例えば，結婚式の日の天候と花嫁の運勢について，英米では「陽光の降り注ぐ花嫁は幸せになる」と一般的に言われるが，この表の解釈に対して，好天に恵まれなかった花嫁についても「雨の降り注ぐ花嫁は幸運である」という裏の解釈がある。人々の考え方にはこうした裏の解釈――場合によっては「救い」とも見做されるもの――が見られ，そこには人間の温かみのある英知さえをも覚えさせるものがある。

今号では，英米の人々の「婚約」から「結婚（式)」までに至る間の習慣と，それに関する迷信，俗信等をとり上げ，文芸作品からの用例をも引用しながら考察を試みたい。

1 婚約（engagement）

英米人の間では，婚約に関するさまざまな信があるが，その中で特に今なお言い伝えられるものに「死者を証人にする」婚約がある。

＊「開いている墓穴の上で，婚約（その他契約，約束）を交わせば，それがめでたく履行されることになる」と言われる。死者の棺が横たわる墓穴の上で握手をして誓えば，それを破った場合には，その誓いの証人たる死者によって復讐される，と信じられた[1]。日本でもこれに相通じる俗信があり，「葬儀の時にもち上がった縁談は良縁」と言われる。

次は婚約者についての俗信である。

＊「婚約している男女が他人の結婚式で並んで歩くのは不吉」とされる。これについては特に，その男女が友人等の結婚式で新郎新婦の付添人を務める場合などに，式後に教会から並んで帰って来たりすると，次に自分たちが結婚式をして夫婦として教会から帰って来ることがなくなるであろう，と信じられるようである[2]。

＊「婚約している男女がともに写真に写るのは縁起が悪く，破談になる恐れがある」とも言われる。

2 婚約指輪（engagement ring）

婚約の際に交わされる婚約指輪に関して次のような俗信がある。

＊「婚約指輪を贈られた女性は，それを他人にはめさせてはいけない。それをすると面倒なことを引き起こしかねない」とされる。ところが，婚約指輪をもらったという幸運にあやかりたいために，友人がその指輪を借りて呪いをすることもある。

＊「友人は借りた婚約指輪を自分の左手薬指の第一関節まではめ（それ以上深くはめないものとされる），自分の心臓の方へ3度回しながら願いを唱える。」指輪が返される時には双方ともに『ありがとう』とは言わず，返す者は持ち主に『あなたに幸運を』と言い，持ち主は返す者に『あなたの願いが叶いますように』と応える[3]。

中世には，婚約の際に金（gold）の破片が用いられた習慣があったようである。T. S. Knowlsonは，相互の婚約のしるしとして金片あるいは銀片を‘each keeping half’（「双方が半分ずつ保管する」）という方法をとっていた[4]，と記述している。

またTad Tulejaは，婚約の際の金の指輪の交換が今日のダイヤモンドの指輪の交換の流行に変遷してきたことに関して，次のように記述している。

> The exchange of gold rings was a later medieval development, comfortably assimilated into the ancient bargain–sealing tradition. According to Marcia Seligson, the populality of diamonds came in even later than that. The Austrian archduke Maximilian presented the first notable betrothal rock to his French fiancée, Mary of Burgundy, in the fifteenth century. Diamonds became universally accepted as engagement stones only in the last century.[5]
>
> （金の指輪の交換は，かつての契約保証の習慣にうまく倣って中世後期になって発達した。マーシャ・セリグソンによれば，ダイヤモンドの流行はこれよりさらに後で，オーストリアのマクシミリアン大公が15世紀にフランス人婚約者ブルゴーニュのメアリーに初めて婚約のダイヤモンド石の指輪を贈った話は有名である。ダイヤモンドがその後婚約指輪として広く一般に認められるようになったのは，19世紀になってようやくのことである。）

ダイヤモンドが婚約指輪によく用いられるのは，その象徴的な魅力という価値があるからであって，決して希少価値があるからというわけではないであろう。その象徴的な魅力の一つは，ダイヤモンドが現存する最も固い物質であり傷がつかないところから「不滅の愛を象徴する」[6]点であり，またその二つ目は，程よく小面を刻むと光の反射による輝きが見られ，それが内面的な炎とも結びつき「情熱の愛を象徴する」[7]点だと言えよう。なお婚約指輪については，一般的にはダイヤモンドの指輪が多いようであるが，その他に未来の花嫁の誕生石を細工した指輪が贈られることもある。

3 結婚予告（marriage banns）

婚約の成立した男女が結婚式を挙げるためには，その前に所属の教会の牧師の口から引き続き（少なくとも）3回，日曜日毎にその結婚の予告をしてもらい，異議を申し立てる者がないことを確かめねばならない。

＊「結婚予告の中断は縁起が悪い」とされる。結婚予告は3週「連続して」日曜日に行われねばならないが，特にその連続性についての信は相当に強いようである。

＊「教会で自分の結婚予告を聞いたりすれば，不幸を招くことになる」とされる。これは男女ともに当てはまるとされるが，特に女性の場合の不幸は次に示される通りである。

> Should a bride-to-be attend church and hear her own banns of marriage read out, she will run the risk of having her children born deaf and dumb.[8]
>
> （花嫁になろうとする者が教会に行き，自分自身の結婚予告が読み上げられるのを万一聴いたりすれば，耳や口の不自由な子供を持つ危険を冒すことになろう。）

ところで，なぜこうした不幸を招くことになるのかについてであるが，それは，「この行為が慎み深さを欠くために厳しい罰を受けることになる」[9]とされるようである。

4 結婚式の日取り

＊「六月に結婚する花嫁は幸福になる」とよく言われる。これについては，‘June bride’（「六月の花嫁」）という言葉がよく知られている。六月に結婚する花嫁は必ずや幸福になるとのことで，六月は一般的に結婚式に人気のある月である。しかしながら，なぜ六月の結婚が幸福と結びつくと考えられるようになったのであろうか。これについてはTad Tulejaの次の記述がある。

> The secret of the month's [June's] propitiousness is that Juno was the Roman goddess of marriage. It is because she presided over the sixth month of the Julian calendar that it was considered lucky for weddings.[10]
>
> （この月［六月］が幸運な月であるとする秘密は，ユノーがローマ神話の結婚の女神であったことである。六月が結婚するには幸運であると考えられたのは，他ならぬ彼女がユリウス暦の六番目の月を統括していたからである。）

この見解は根底的な理由として，確かに説得性のあるものと言えよう。しかし，今日においても六月の結婚式に人気があるのは，さらに現実的合理的な別の理由が考えられるであろう。それは，六月が先ず時候がよいという点で，さらにそれに併せて夏の休暇が始まる時期という点で，実際上，挙式，披露宴，またハネムーンにも適しているからであろう。

これとは逆に，挙式が避けられる月がある。

＊「五月に結婚式はしないもの」とされる。一般に欧米では古くからこのことが言われるが，その通説的根拠となっているのは次のようなことである。

> May is traditionary unlucky for weddings because in ancient Rome, this was a month for remembering the dead, and an ill-omened time for lovers.[11]
>
> （五月が伝統的に結婚には縁起が悪いとされる理由は，古代ローマでは五月が死者を祀る月であり，恋人たちには不吉な時期であったからである。）

死者との関わりからくる「不浄」故に結婚式を行うことは到底許されないものとされた。'Marry in May, you'll rue it for aye.'[12]（「五月の結婚，一生後悔。」）のProverb（諺）さえ見られる。しかしながら一方，「結婚には縁起が悪いとされる五月が婚約には適切な月とされた」[13]とZolarが記述しているのは興味深い。これについては既述の項［1　婚約（engagement）］で扱った「死者が婚約の証人になる故」がその理由であろう。

結婚式の日取りについては，曜日による縁起の善し悪しがあるとされる。

＊「挙式日は曜日によって善し悪しがある――月，火は善しで水は最善。木，金悪しく，土は最悪」と一般に言われる。次に示すのはCharles　Kightlyの記述しているものであるが，英米人の間でよく知られる古詩（脚韻詩）である。

> Monday for wealth, Tuesday for health, Wednesday the best day of all ; Thursday for crosses, Friday for losses, Saturday, no luck at all.[14]
>
> （月曜日の結婚は豊かな生活，火曜日の結婚は健やかな日々，水曜日の結婚は無上の幸せ。だが，木曜日の結婚は難儀多く，金曜日の結婚は悲運に泣き，土曜日の結婚は不運そのもの。）

この古詩については類型があり，例えばI. Opie & M. Tatemが記する一例では，MondayとTuesdayの内容，及びThursdayとFridayの内容がそっくり入れ替わっている[15]。またE. & M. A. Radford及びJames Kircupの示すものでは，ThursdayとFridayの内容の入れ替わりが見られる[16]。しかしながら，これらはいずれの場合にせよ，脚韻を踏んでいる語同士の入れ替わりであり，内容については前半の月曜日～水曜日は総じて「善し」であり，後半の木曜日～土曜日は総じて「悪し」であり，大方の内容に変わりがないと言えよう。

＊「他の曜日はともかくも，特に，金曜日の結婚式は避けるべきである」と言われる。金曜日には結婚式が絶対に行われないというわけではないが，キリスト受難の日が金曜日であったとされる点から，一般にキリスト教徒の間では今日でもやはり避けたがる人がいると言われる。かつて人々の間で，金曜日に新しい物事に取り組んだり，旅に出たりするの

を避けようとする傾向が強かったことについても，同じ理由によるものである。

ところで，今日英米の人々の間で結婚式が一番多い曜日と言えば，恐らく，前述の古詩で「不運そのもの」とされる土曜日であろう。挙式の当事者及び関係者，また招待客の諸事情を考慮すると，土曜日が「縁起がよい日というよりも，最も都合がよい日」ということになるのであろう。

挙式の曜日による善し悪しについて，さらにここでもう一点補足をしておかねばならない。それは日曜日についての考え方の二面性である。

＊「日曜は結婚には悪しき日」と一般に考えられている。しかしながら，このことについて明確に記載されているものが余り見当たらないが，Fanny D. Bergen は，“Sunday no luck at all.”[17]（「日曜は全く悪しき日。」）と記述しており，これは土曜日の場合と全く同じ内容である。つまり，安息日である日曜日は聖なる日であるので静かに過ごすべき日とされており，浮かれ騒ぎが伴われがちな晴れがましい結婚式を執り行うのは神への大いなる冒涜と考えられるようである。

しかしながら，一部には日曜日は聖なる日である故に，結婚式を挙げ神聖なる生活を始めるにはこの上なく幸運な日である，との考え方もあるようである。

＊「日曜の結婚は幸運」とも言われる。例えば，デヴォンシア辺りでは実際にこう考えられるようである。これに関連することであるが，一般に聖職者は安息日を破るのはもってのほかとして反対するようであるが，かつて船乗りたちの間では，日曜日に船出するのが一番縁起がよいとされ，現にそうする傾向が強かったようである。

その他，挙式を避けるべき時節として次のようなことが伝えられている。

＊「四旬節（Lent）に結婚するのは縁起が悪く，不幸に見舞われる」とされる。これは今日でも拘る人が結構いると言われるが，かつては相当に強烈な教えとして伝えられたようである。四旬節とは，灰の水曜日（Ash Wednesday）から復活祭前夜（Easter Eve）までの40日間（40 weekdays），荒野のキリストを記念するために断食やざんげを行う習慣である。この「悔悟の40日間」における結婚は神へのこの上なき冒涜であり，決して許されないこととして厳しく戒められた[18]。これに関して R. Chambers はこう記述している。

> ‘Mary in Lent, And you’ll live to repent,’ is a common saying in East Anglia ; . . .[19]
> （「四旬節に結婚すれば，生涯後悔することになる」はイースト・アングリアではよく聞かれる言い回しである。）

また，E. C. Brewer は，古い時代の “Close Seasons for Marriage”（「結婚を禁ずる時節」）について次のように説明している――「降臨節（Advent）から聖ヒラリウスの祝日（1月13日）までと，大斎前第三主日（Septuagesima）から復活後の第一主日（Low Sunday）までと，祈願祭前の日曜日（Rogation Sunday）から三位一体主日（Trinity Sunday）までの時

期を指す。英国国教会では宗教改革後も守られたが，自由共和国の時代には廃れた。…またローマ・カトリック教会は，結婚を禁ずる時節の残りの時期，つまり降臨祭の日曜日から公現祭（Epiphany）後8日目までと，灰の水曜日（Ash Wednesday）から復活後第一主日までの間，結婚式のミサは認められない。」[20]

次に，結婚式の日取りの決定時に取り決められる挙式の時刻に関しても，次のようなことが伝えられる。

＊「日没後に結婚式を挙げると花嫁は幸福になれず，楽しみのない人生を送り，子供を失い，あるいは早く墓場に送られる」と言われる。E. & M. A. Radfordはスコットランド地方にも伝えられるこの信を次のように記述している。

> Wedding after sunset entails a bride to a joyless life, the loss of children, or an early death.[21]
> （日没後に結婚式を挙げると，楽しみのない人生，子供を失うこと，あるいは早逝を花嫁に課すことになる。）

また，取り決められた挙式日の変更，特にその延期については次のように言われる。

＊「結婚式の延期は縁起が悪いので避けるべき」とされる。また，挙式を延期するのならまだしも，取り止めにするとでもなれば，縁起が悪いどころの話ではなくなるであろう。

5 結婚式の日の天候

＊「結婚式は晴れの日がよい。」これは言葉を換えて，「陽光の降り注ぐ花嫁は幸せになる」とも言われる。後者については，Proverbに次のものがある――〈ただし，この諺にはもう一つのことも並述されている。〉

> Happy is the bride the sun shines on, ‹and the corpse the rain rains on.› [22]
> （陽光の降り注ぐ花嫁は幸せになる。〈そして雨の降り注ぐ死体は幸せである。〉）

文芸用例として，William Shakespeare, *Twelfth Night*（1601）に次のものが見られる。

> *Olivia*. . . . Plight me the full assurance of your faith,
> . . . . . .
> . . . and heavens so shine,
> That they may fairly note this act of mine! [23]
> （[オリヴィア] …あなたの愛が誠のものである証しを私に誓って下さい。……そして天よ，輝いて，この私の行為にどうかご好意をお示し下さい！）

天候に関しては，好天に恵まれず悪天候の中で挙式と祝宴を行わねばならぬこともある。こうした場合にも，それなりの道が拓かれているものである。人の世の出来事についての考え方には，表の解釈に対しては，しばしば裏の解釈というものがあるようである。つまり，雨降りの日の結婚式に対してもそれなりにそれを肯定して「善し」と見る考え方，見方があるということである。地方によっては，むしろ雨降りの結婚式の方が好ましいのだとする積極的な考え方，見方さえあるほどである。

＊「結婚式は雨降りがむしろ好ましい」ともされる。次は James Kircup の記述である。

> . . . in certain parts of Britain, notably in Hampshire, Derbyshire and Lincolnshire, they prefer a rainy wedding day, and quote the superstitious saying : "Lucky the bride the rain rains on." [24]
> (…イギリスのある地域，特にハンプシア，ダービーシアそれにリンカンシアでは，結婚式は雨降りの日がむしろ好まれる。それで次のような迷信的な諺が引用される——「雨の降り注ぐ花嫁は幸運である。」)

同様の考え方が日本にもあり，「降り込みは縁起がよい」と言われるようである。雨の日の嫁入りという運の悪さを，逆に「縁起よし」に転じようとする人々の温かみのある知恵なのである。さらにこれは，雨の日の引っ越しにも流用されたりするようである。

＊「花嫁はネコに十分餌を与えることによって挙式日が晴れの日になるように願い，さらにそれが幸福につながるようにと願う。」[25]古くから一般に，挙式日の天候は花嫁の将来の幸福を占うもの，と信じられた。晴れになれば幸福になれる，というわけである。そのため花嫁は挙式前に，ネコに餌を与えて晴れにしてもらえるよう願ったのである。

ところで，なぜ「ネコに餌を与える」のか，例えばなぜ「イヌに…」とは言われないのかという疑問がある。これに対する推測の答えとして，「かつて悪天候は悪魔や魔女によってもたらされるものと考えられたので，その悪魔や魔女のご機嫌を損ねないようにするために，その使いとされるネコに十分食物を与えて首領にうまく取り持ってもらおうとした」と考えられないであろうか。そうなるとやはりイヌではなくネコなのである。

6 結婚式への招待（状）

挙式日，手筈，その他要件の取り決めがなされると，頃合いを見て親類，知人，友人等に結婚式の招待状を出すことになる。この招待状には披露宴の案内状，及び出欠席の返信用郵便物も同封されることが多い。

招待状は花嫁になる者の親が出すもの，とされる。特別な事情のない限り，これが通常の方法である。なお，ここで補足しておきたいのは，一般に，結婚式と披露宴にかかる経費はすべて花嫁側の親が負担するものとされる，ということである。

7 結婚・結婚式一般……［挙式そのもの，及びその関連事項については次号扱い］

当項目では，結婚及び結婚式一般に関するいくつかの迷信，俗信等を扱う。

＊「苗字の頭文字が自分の苗字の頭文字と同じ男性と結婚するのは，女性にとって縁起が悪い」とされる。これに関する古来の言い回しが次のように紹介されている。

> . . . Another thing that concerns the bride is the initial letter of her future husband's name: "Change the name and not the letter, Change for worse and not for better." [26]
>
> (…花嫁にとって大切なもう一つのことは，彼女の未来の夫の苗字の頭文字である。「苗字が変わって頭文字が変わらないのは，よりよきどころかよからぬ変化である。」)

結婚によって新たな変化を受けることに期待を寄せる一方，肝心な苗字の頭文字が変わらないのでは「先のことも変わり映えしない」ということに結びつくのであろうか。

＊「きょうだいのうちで年下の者が年上の者よりも早く結婚する場合には，兄や姉は結婚式のときに，靴を脱いで（足袋裸足で，あるいは裸足で）踊らねばその不運を解消できない」と言われる。文芸用例に，William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*（1593－94）の次の箇所が見られる。

> *Kath*. . . . , she [my younger sister] must have a husband,
> I must dance barefoot on her wedding-day,
> And for your love to her lead apes in hell. [27]
>
> ([カタリナ] …彼女［私の妹］は夫を迎えるに違いない，
> 私はあの子の結婚式に裸足で踊らねばならないわ，
> そして地獄へサルを引いていかねばならないのよ［オールドミスになるんだわ］，
> あの子ばかりお可愛がりになるのですもの。

なぜ「裸足で踊ることがその不運を解消することになる」のか，という疑問については答えを見出すのが難しいようである。一つの推測が許されるとすれば，「裸足で踊ることによって人目をひき，場合によっては変わった人だと非難もされようが，ここにも立派な独身者がいるという訴えからその存在感を大きくすることによって，よい相手の出現を期待する」と考えられないであろうか。なお，「地獄へサルをひいていく」の意味合いについては，T. F. Thiselton Dyer は，「オールドミスになる」という一般的な解釈はあるが，Shakespeare のこの表現に関しては多様な議論がある[28]，と記している。

＊「早婚は葬式を早める」とも言われる。古い Proverb に次のものがある。

Early wed, early dead.[29] (早い結婚，早い死亡。)

＊「結婚式の式次第を読み通す婦人は決して結婚できない」とされる。かつては一般に広く言われていたようであるが，例えばサマセットシア辺りでは，結婚式の式次第を家で読み通す婦人は結婚できなくなる，との信が相当に根強く残っていたようである。
＊「花嫁の付き添い役を頻繁に（一般的に，3度または3度以上）務めると，その女性は生涯独身で過ごすことになりかねない」と言われる。
＊「結婚式は続くもの」とよく言われる。よいことは是非とも続いてほしいという人々の願いが，ありがたくも叶えられることがある。文芸上の用例として，Charles Dickens, *Dombey and Son* (1848) の次の箇所がある。

. . . the cook says at breakfast-time that one wedding makes many, . . .[30]
(…朝食の時に料理人は，一つの結婚式が多くの結婚式を生むのだと言う。…)

また，英米人の間では次の Proverb もよく知られているようである。

One wedding begets another.[31] (結婚式は続くもの。)

[次号「花嫁衣装の条件・挙式と作法・花嫁花婿の心得」等に続く。]

Acknowledgements
貴重なご教示をいただいた Amy R. Staley 女史（元，中国短大講師）にお礼申し上げる。

Notes

1) "Funerals," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames & Hudson, 1986) 121 (L).
2) "Engaged Couple Walk Together at Wedding," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990) 141.
3) "Engagement Ring," Opie & Tatem, 141; Engagement Ring: 1955, *Woman's Illustrated*.
4) T. Sharper Knowlson, *The Origins of Popular Superstitions and Customs* (1910; London: T. Werner Laurie, 1930) 95.
5) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 47.
6) "Diamond," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobes, 3 vols. (New York: Scarecrow, 1962) vol. 1, 440 (R) −41 (L); Diamond: . . . symbolic of . . . constancy, . . . the indestructible, . . .
7) "Diamond," Jobes, vol. 1, 440 (R) −41 (L); Diamond: . . . symbolic of . . . love, . . .
8) "Banns," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (1949; New York: Greenwood, 1969) 27.
9) "Marriage Banns," Opie & Tatem, 239; Marriage Banns: 1873, *Lancashire Legends*: . . . as a punishment for her want of decency.

10) Tuleja, 52.

11) *Folklore, Myths and Legends of Britain*, ed. Reader's Digest Assn., 2nd ed. (London: Reader's Digest Assn., 1977) 58 (L).

12) "May," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974) 316, Ⅵ－c.

13) "May," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Schuster, 1989) 244 ; May : . . . While marriage in May was often taboo, it was said to be an excellent month for engagements.

14) "Weddings," Kightly, 229 (R).

15) "Day of Wedding : divination rhyme," Opie & Tatem, 433 ; 1867, *Lancashire Folk-lore*.

16) "Wedding Times," *E. & M. A. Radford Encyclopaedia of Superstitions*, ed. & rev. Christina Hole (1948 ; London : Hutchinson, 1961) 359. / James Kircup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo : Asahi Press, 1975) 26.

17) "Love and Marriage," *Current Superstitions*, ed. Fanny D. Bergen (1896 ; New York : Houghton, Mifflin & Company, Kraus Reprint, 1969) 61, [349].

18) "Lent," Kightly, 150.

19) "Marriage Superstitions and Customs," *The Book of Days, A Miscellany of Popular Antiquities in Connection with the Calendar*, ed. R. Chambers, 2 vols. (London : W. & R. Chambers, 1863) vol. 1, 723 (L).

20) "Marriage ; Close Seasons for Marriage," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, orig. ed. Ebenezer C. Brewer, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed., 6th imp. (1870 ; London : Cassell, 1978) 688.

21) "Marriage," E. & M. A. Radford, 169 (L).

22) *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, rev. F. P. Wilson, 3rd ed. (1935 ; Oxford : Clarendon, 1992) 85 (R).

23) William Shakespeare, *Twelfth Night*, Ⅳ－3, 26－35, Arden Shakespeare (paperback), ed. J. M. Lothian & T. W. Craik (1975 ; London : Routledge, 1994).

24) Kircup, 26.

25) "Bride Feeds Cat," Opie & Tatem, 40.

26) "Bride," *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend*, ed. Maria Leach, paperback (1972 ; New York : Harper & Row, 1984) 164.

27) William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*, Ⅱ－1, 32－34, Arden Shakespeare (paperback), ed. Brian Morris (1981 ; London : Routledge, 1994).

28) T. F. Thiselton Dyer, *Folklore of Shakespeare* (1883 ; Williamstown, MA : Corner House, 1983) 354.

29) Wilson, 211 (R).

30) Charles Dickens, *Dombey and Son*, XXXI, The Oxford Illustrated Dickens (1950 ; Oxford : Oxford UP, 1991) 437.

31) Wilson, 875 (R).

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans–(7) Ⅲ LOVE AND MARRIAGE Part 2 : On the Customs and Superstitions of Engagement, Marriage Banns and Wedding

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Liberal Arts and Science,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima–cho, Kurashiki–shi, Okayama 712–8505, Japan

(Received September 30, 1998)

It is common for the bride and bridegroom also to wish to have a sunny day at their wedding. In England and the United States, people have a familiar proverb on the weather at the wedding : "Happy is the bride the sun shines on, . . ." People have believed the bride who marries on a sunny day will be happy in her married life.

All the brides, however, are not always lucky enough to get married in good weather ; some brides will have to get married on a rainy day. In such an occasion, however, we should be relieved to know that people are very kind and warm–hearted to be prepared with the following expression : "Lucky the bride the rain rains on." They never fail to see things from another standpoint different from the usual standpoint. That is, they try to see them with their special kindness, which might be regarded as a merciful "relief" for persons out of luck. When we come to notice the warm–heartedness shown by people, we cannot help admiring, to a great extent, not only their careful consideration but also their great wisdom.

In this paper, we will list a variety of customs and superstitions of engagement, marriage banns and wedding. In addition, we will speculate on the origins, reasons, effects, and other ideas of practical usages from English literary works. This speculation should help us to have a better understanding of the ways of thinking and behaving of English–speaking people.